

---

# 練習作

ダワダワ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

練習作

### 【Nコード】

N1915V

### 【作者名】

ダワダワ

### 【あらすじ】

文章の練習。どらみちゃん（人間スタイル）が出てきます。

いきなりドラえもん女が現れた。

机の一番大きな引き出しからひよっこり出てきて「やあ」と言った。だからドラえもん女だと思った。

たしかにデリヘルが部屋を間違えた可能性は否定できないが、机の引き出しから出てくるデリヘルというのは聞いたことがないので、とりあえずその線は無視した。

「どちらさまですか？」

俺は、祖母の家にある包丁並みに切れの悪い眠気を押さえつけながら、質問した。

分からないですか。そう彼女は言った。分かるはずがない。そう返した。

「僕に机の引き出しから出てくる友人はいないから、とりあえず物理的に出会ったことのある人じゃないことはわかるよ」

「……そうですね。正解です」

悲しそうに彼女は言った。慰めなければならなかった。昔叔母が「女の子と仲良くなりたかったら、慰めればいいのよ」というていたのを思い出した。

「机から出てくるのって、なんだか近未来的だね」

そんな言葉しか浮かんでこなかった。

「そうかな」彼女は言った。

「そうだよ」

彼女は少し愉快そうにもう一度「そうかな」と言い、僕も「そうだよ」と言った。

「……」

なんだか違和感がある。それがなんなのかわからず、もやもやする。

と、そこでひとつ思い出した。

「もしかして、君はどらみちゃんかな」

たしかドラえもんには妹がいたはずだ。いつだったか、話していたのを聞いたことがある。

「……！ ふふ、はじめまして」

悲しそうに、しかし笑って彼女は言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1915v/>

---

練習作

2011年10月9日13時50分発行